

賀川豊彦の「実現の神学」思想

——社会運動の出発点としての神の愛——

大野 剛

OHNO, Takeshi

目次

はじめに

1. 経験としての宗教科学
 - 1.1. 演繹型神学と帰納型神学
 - 1.2. 聖書神学と賀川豊彦
2. イエスの経験とパウロの言葉
 - 2.1. イエスの宗教経験
 - 2.2. パウロの証言
 - 2.3. 賀川豊彦のパウロ神学解釈
3. 個人の救済と社会の改造
 - 3.1. 社会改造の仕組み
 - 3.2. イエスの自覚
 - 3.3. 十字架の選択
4. 社会運動の根本哲学としての神の愛
 - 4.1. 神学思想と科学哲学の結合
 - 4.2. 十字架愛の実践

おわりに

はじめに

20世紀前半、社会事業家として一世を風靡したのは賀川豊彦（1888-1960年）であった。彼はセツルメント活動から始めて、日本初の労働運動農民運動の先頭に立ち、全国的な協同組合体制を立ち上げた。また大

衆小説を出版し、キリスト教伝道者として全国を巡回したほか、国際的には平和運動を推進するという側面もあった。当初は熱狂的に歓迎されたが、没後は毀誉褒貶相半ばする人物であった。最近はほとんど忘れ去られている。それゆえ彼は何を期待され、何を疎まれたのかは探求に値する。そのために彼の根底にあるものの考え方を吟味しなければならない。彼が現実⁽¹⁾に生活の場で格闘していた思想的な原点を問いたい。

本論では賀川豊彦を彼の言動からキリスト教社会事業家と認識して、そのように活動せしめた思想の解明を目指す。彼を活動に駆り立てた動因はどこにあるのか。彼はどのように彼の神学思想を形成したのか。それをどのように提唱して社会思想、活動理念に結びつけたのかが課題である。彼はまず『基督伝論争史』(1913年)においてそれまでの神学を徹底的に研究した。その後「イエス伝三部作」(『イエスの宗教とその真理』1921年、『イエスの人類愛の内容』1923年、『イエスの内部生活』1924年)、「神学四部作」(『神に就いての瞑想』1930年、『十字架に就いての瞑想』1931年、『キリストに就いての瞑想』1932年、『聖霊に就いての瞑想』1934年)が著され、ここに彼の問題意識、瞑想、体験が反映された。これらは神学そのものを議論するというよりも宣教のために人々に神学を啓蒙するという方向であった。また『基督山上の垂訓』(1927年)では彼がどのように聖書を理解していたかを見ることが出来る。専門研究では各分野の協同組合論が論じられた。『自由組合論』(1921年)、『医療組合論』(1934年)、『日本協同組合保険論』(1940年)等協同組合論は日本の先駆けとして協同組合界の基盤を形成した。また米欧の指導者に歓迎された『友愛の政治経済学』(1936年)の役割も大きいといえるだろう。このような各方面の議論の原点として『実現の神学』(1929年)が考えられる。

賀川豊彦の神学思想を解明する前段として、まず神学の構造を整理しなければならないだろう。神学は今日、組織神学、聖書神学、歴史神学、実践神学に4分科⁽¹⁾されているが、雨宮栄一によれば狭義の神学では神の超越性を強調する宗教改革的福音主義神学と人間の内面性を強調する近

代的自由主義神学に分けられる⁽²⁾。賀川豊彦の神学は出自からは前者に属するが、内容からすれば後者に属する。すなわち彼をキリスト教に導いたのは米国南長老派の宣教師⁽³⁾であり、その立場は生涯貫かれた。これは教義的というよりも、宣教師と賀川豊彦の人格的なつながりであった。一方内容は人間の意識と人格性を重視する立場であるのは著作から明らかである。彼の米国伝道妨害の急先鋒は保守派の牧師⁽⁵⁾であった。言い換えれば彼は福音主義神学を踏まえるが、そこに拘束されず新しい自由主義神学を提唱した。彼は「狭義の神学の枠組みから解放されて、自分の信仰から自由に聖書の宗教、イエスの宗教を啓蒙的に論評することをこころみ⁽⁶⁾た」のである。

したがって福音主義神学の領域内で賀川豊彦を論じたとしても意を尽くせない。しかしだからといって、理性の自立を唱える啓蒙主義的自由主義者としての議論ではない。それは「ドグマとか理性ではなく、双方の総合、あるいは第三の道⁽⁷⁾」である。賀川豊彦の神学の領域はこれまでの枠組みに当てはめれば、狭義と広義の間、福音主義と自由主義の中間に位置付けられることになる。すなわちどの分野にも属し得ない思想、曖昧な周縁部の思想であることを意味する。それゆえにこれまで神学の土俵の上で正当に議論されることはなかったといえよう。

しかしながら多様化、複雑系社会の今日、ものごとを統合的な観点から考える必要もある。座標平面でいうならば、y軸交点から上部に神学、下部に科学を、x軸交点から右側に保守主義、左側に自由主義を取るとすると、賀川豊彦の神学思想はどの象限にも関与するのであるから原点付近を占めることになり、むしろ特定の思想に傾かないという特性を示す。分析を進めると遠心力が働き各々の思想はますます特殊化抽象化するのに対して、統合化を進めると求心力が働き原点に収斂することになる。賀川豊彦の場合、座標の原点に垂線を立てると統合化方向へ積み上がる傾向がある。それは宇宙の目的を目指すといえるだろう。あるいは逆に原点を掘り下げると悪の意味を究明することになると考えられる。どんなに科学技術を進化させたとしても、例えば人類を滅ぼすような核兵

器は否定されなければならないということを示す。したがって賀川豊彦の神学思想は再吟味に値する訳である。このような立場であるから彼は正統主義を批判しなければならなかったが、それゆえに社会運動を推進することができたという。また「正統主義的プロテスタント・スコラシズムの反動であった敬虔主義者たちはおしなべて体制的教会の批判者であり、体系的神学を嫌い、愛の実践を重んじた人たちであった。不思議に賀川豊彦の主張と一致する⁽⁸⁾」という議論があるように、実践派は目立たないが前例が無いわけではない。

賀川豊彦の神学がこれまでどの範疇にも収まらなかったのはなぜか。彼は既成の枠組みの中の専門家ではなかった。しかしスラムにいのちを捧げた献身者として明確な精神があった。兩宮栄一のいう「精神のある非専門人」に該当する。彼は神の意思を実現しようとした。これに対して M. ウエーバーの唱える禁欲的な職業人は、まさに「精神のない専門人」である。

(ウエーバーの「精神のない専門人」に倣えば) あの厳しい時代を生きた賀川豊彦は「精神のある非専門人」であった。今日にいたるまで賀川の思想と理論にある非専門性がどれだけ批判されてきたであろうか。・・・賀川は専門人でなかったし、またそうならなかった。非専門人であった。ただ賀川には精神があり、志があり、またエーツがあった。賀川の全生涯、その内側より駆り立てる内的な推進力があった。賀川はその生涯において、富国強兵の道をひたぶるに走る近代日本の歴史にあって、常に忘れられ、捨てられ、そして傷ついた人たちのもとに、あのよきサマリア人の如く、走り寄ってきた⁽⁹⁾。

とあるとおりである。

彼はキリストのためにいのちを捧げた信仰者であった。同時に日本の社会運動はほとんどが賀川豊彦によって先鞭がつけられたといわれるほ

ど類い稀な社会運動家であった。一方で『貧民心理の研究』に端を発する被差別部落民問題に関しては、冷酷な異端の牧師といわれてきた。賀川豊彦の神学と方法論はまことにそのような牧師であるのか、それとも今日の行き詰まり社会を打開する新しい神学の構築を意味するものなのかについては注意深く吟味しなければならない。

1. 経験としての宗教科学

1. 1. 演繹型神学と帰納型神学

神学は科学として扱うことができるのか。現状では両者の隔たりは大きい。賀川豊彦は可能であると次のように主張する。物理化学が経験を基礎として扱うように、神学も何十万年に亘る人間の経験を総合する科学として扱うことができる。そのように扱われなければ、神学は「単なる独断かあるいは権威をもって定められた一つの信仰箇条にすぎない」のではないかと。そして次のように神学を定義する。

神の経験というのは、有限の世界における無限の経験である。それは単に抽象的な神の思想ではない。・・・有限の世界に対する生ける心理的事実を根底とした者の宗教思想を纏めたものが神学である。⁽¹⁰⁾

これは経験を土台とする帰納的な方式であって、賀川豊彦のいう概念を土台とする演繹的神学とは明確に区分される。彼は後述するように経験型はイエスの方式であり、概念型はギリシャ哲学の方式であると見做した。彼はギリシャ方式の演繹型を退け、イエスの方式による帰納型神学を唱えたのである。

経験の集積は歴史を現す。歴史神学に関してはヘーゲルの議論があげられるが、これは弁証法であり、ここでいう帰納法に基づくものではない。賀川豊彦は帰納法神学とは教理史における哲学面を外し、宗教心理的側面を歴史的に総合した新しい神学の大家系であるという。そこに「人間経験のもっともよいものを渡し残し、この人類体験に合致するもの

みを見出していき⁽¹¹⁾たい」として、教理史において宗教心理を哲学に優先させた。彼は過去の経験を精製し結晶させること、心理的な事実を神と人間の関係の場において統合することを期待したのである。

賀川豊彦によれば、キリスト教神学はギリシャ哲学に由来する組織神学と聖書を基礎とする聖書神学の二つの体系に大別される。前者は概念的であり聖書神学を弁証するのに対して、後者は生活経験と宗教心理を基礎として出発するという。彼は組織神学の歴史的淘汰を通じてその傾向を見ようと次のように解説する。

聖書神学はイスラエルの数千年間にわたる宗教経験を基礎としている。その記録の中に深い神の体験がある。宗教心理を基礎とし、経験を総合した科学的神学は、であるから聖書神学から出発せねばならぬ。聖書神学はまた書けない人類の経験である。この意味において聖書神学は神から人類への黙示とも言える。私は先ずキリストの宗教経験を考えたい。それがだんだん発展して、今日のキリスト教神学となったのである⁽¹²⁾。

すなわち賀川豊彦のキリスト教神学とは宗教経験を踏まえた聖書神学をいうのである。

1.2. 聖書神学と賀川豊彦

賀川豊彦の神学は聖書神学から出発する。彼はつねに教理の実践を第一義としており、教理そのものを学問として分析することに重きを置いていなかった。『基督伝論争史』の研究において神学論争は主として組織神学の方面であり、それはイエスの宗教経験には直接関係のないことと見做したことによるのであろう。事実、賀川豊彦は抜き刷りを含めて150以上の著作を出版しているが、神学について言及した論文は後述する黒田四郎もいうように『実現の神学』以外には見当たらない。『実現の神学』は1929年イエスの友の会の修養会⁽¹³⁾でなされた講演を秘書吉本健

子が筆記したものである⁽¹⁴⁾。

もともと賀川豊彦自身は神学そのものを神学として議論することを否定していた。彼が同労者としてまた後継牧師として期待していた黒田四郎によれば、その理由は次のようにまとめられる。①彼は当時の神学者よりも確かな知識を持っていたから、改めて神学する必要はなかった。②彼は生まれつきの自由人で束縛を忍べなかった。カルヴァン主義を教えられたが、他人にまで押し付けようとはしなかった。③人間性を否定し、自然啓示を軽んずるようなバルト的な神学には興味をもてなかった。そのため神学という演題がついた講演は『実現の神学』のみであったとい⁽¹⁵⁾う。また賀川豊彦に心酔し、後に全集を刊行した武藤富男によれば、彼は神学者としてではなく、神学を民衆に解説する説教者として活動したのだと、賀川豊彦を引用して次のように述べている。

「神学とは要するにありがたいキリストの贖罪愛の神学でなければならぬ。ところが日本の神学は、一体理屈が多くてむずかしすぎる。神学も、それ自身の目的にはあまりにかけ離れた道を迂回している。およそ贖罪愛の外に神学を説く道があるだろうか。私は私自身にいうのだ。神学も民衆に渡すときには愛をもってこれを翻訳しなければならぬ」(とあるように)まことに賀川の一生はキリスト教神学を贖罪愛の実践に翻訳して民衆に渡すところの生活であった。だから彼は神学者の系列には属さなかつた⁽¹⁶⁾。

要するに賀川豊彦はいわゆる神学には関心がなかった。黒田四郎、武藤富男のいうとおりである。しかしながら神学論として一度だけ語られたという『実現の神学』には、賀川神学の出発点を確認する上で重要な意味がある。いわば賀川神学の基本設計である。次いで実施設計として民衆に理解されるような方法で神学の全体像が説かれた。その内容は前述した「神学4部作」に詳述されている。

2. イエスの経験とパウロの言葉

2. 1. イエスの宗教経験

賀川豊彦によれば組織神学は概念的であり、神は無限、絶対、全知全能等哲学的思弁的に表現されている。しかしイエスは神の意思を認識し、喩えを用いてあるいは自ら実践することによって神を表した。賀川豊彦はここに神学の原点を見出し、「実現の神学」と称したのである。

イエスは神というものの概念を哲学で表さないで、ほとんど喩えで表している。無限の神を有限の中に表さんとするなら、それは片鱗しか分からない。我々は実体としての姿を現すことはできない。それをイエスは喩えとして表した。イエスは実生活そのものの中に神を表そうとした。これが私のいう実現神学の方面である。⁽¹⁷⁾

これをマタイによる福音書 11 章 2-6 節を例にあげて次のように説明する。

バプテスマのヨハネの弟子がイエスに「あなたはキリストか」と尋ねた時、彼は「目の見えない人は見え、・・・死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。私につまずかない人は幸いである」と応えた。目が見え、死者が生き返るだけならばそれは単なる唯物論的な回答になる。そこで賀川豊彦はイエスが「つまずくな」と付け加えたことに注目した。イエスは、神の存在を無限に表すために「イエスが成すことを見よ」と応えたのだという。イエスが神を抽象的な概念で表さず、生活の場で事実として表現されたことを重視したのである。実際イエスは地上生活の終わりには十字架につかれて自ら神の意思を体現された。イエスが神の意思を実現するという事実に言及され、体現されたことには権威があり、説得力を伴う。彼はイエスの実現性を「実現の神学」として受け止めたのである。

『実現の神学』では、イエスご自身が神を表す象徴行為、言葉でなく行動を通して表現する象徴行為には言及がない。これは喩えに類する宗教

経験として取上げるべきではないだろうか。象徴行為にはより積極的な意味合いがある。すなわち治癒、奇跡、悪霊祓いは神の意思を実践するとき効果的に機能する。同様に罪人たちとの饗食ではイエスの人格を通して神を実現することになる。問題を自覚する人々はイエスとのなんらかの出会いによって神を認識するのである。「実現の神学」としての喩え、象徴行為、十字架の意味は、20世紀日本の神学界の主流であるバルト主義神学とは決定的に相違する。彼ら新正統主義者は賀川豊彦が罪に対して浅薄な理解しかもたないと批判するが、彼はむしろイエスが体現した神の愛を強調した。イエスの経験に基づく神観は賀川神学第一の要点である。

2.2. パウロの証言

賀川豊彦は、イエスが経験的に神を表わしたとするのに対して、パウロはそのイエスの経験の解説者となったと考えた。パウロの場合、当初は人間イエスを見るのみであった。イエスの生涯は刑の執行ですべてが終了したと考え、イエスに追隨する者は神を冒瀆する者として迫害した。これは当時パリサイ人律法学者の標準的な考え方であった。今日でもそのように考える人は多い。ところがパウロはダマスコ途上で復活した主に出会い、聖書の預言がイエスによって実現されたことを体験した。そして迫害者から後には殉教する信奉者へと180度変えられた。イエスは生活に関連する喩えを語り、象徴行為を行うことによって人びとの内面に新しい宗教を啓示したのであるが、これに対してパウロはイエスの啓示に基づいてイエスの神性を証言した。言葉を用いて人々の外面から働きかけたのである。イエスは経験を用いて、パウロは言葉を用いて人々に働きかけたという指摘は、賀川神学の第二の要点である。

賀川豊彦はこのように述べた後、プロシャ思想を先導したハルナックとの違いを明らかにした。彼はハルナックを、『『キリスト教の真髄』の中で新約聖書を第一次イエスのキリスト教、第二次パウロのキリスト教と区分し、第一次が真のキリスト教だと唱えた』と見做す。パウロは単

なる思想家に過ぎず、実生活上の意味がないという理由による。しかしハルナックは必ずしもそのようには論じていない。ハルナックはイエスもパウロも肯定的に描いている。⁽²⁰⁾一方賀川豊彦は、イエスご自身に加えてイエスによって癒される人、救済される人にも注目した。彼の視点からすれば、ハルナックは経験と言葉、イエスの啓示とパウロの宣教、あるいは神の子イエスと人間パウロの区分が明確になされていないということになる。賀川豊彦の独自の解釈といえよう。

2.3. 賀川豊彦のパウロ神学解釈

神学は他の学問と同様に時代とともに進化した。先に述べたように組織神学、歴史神学、聖書神学、実践神学はさらに課題ごと細分化され、議論されている。しかしながら、「実現の神学」本来の目的を果たすために、また必要十分条件を満たすために統合化という方向性を外すことはできない。賀川豊彦は彼の立場からパウロの神学について言及した。すなわち彼はパウロの神学を愛の実践的な神学と見做し、神の愛を実現するため「愛を深く歴史的にまた宇宙的に味わん」とした。それは観念論としての主知神学の対極に置かれる恩寵の神学であるという。彼はそのように見てパウロの神学を探求した。

パウロはキリストの中に贖罪、即ち愛によって過去の一切の罪が赦されることを見たのである。即ち過去の失敗に対しては贖罪があり、現在の足らざる部分に対しては奇跡があり、未来に対しては復活がある。そのすべては神の愛によるのである。⁽²¹⁾

イエスは無限の愛を十字架につくことによって体現されたのだった。これに対してパウロは復活したイエスのうちに神の絶対性を発見し、ロゴスによって有限の世界へ置き換えた。言葉を用いて神の本質、その絶対性を表そうとしたのである。賀川豊彦はパウロのいう神を彼の言葉で次のように翻訳した。

超越の父なる神が、有限の中に実現される。その場合、愛は実現して十字架の形を執る。即ち、神が愛を通じて人間の肉体の中に実現せられる。即ち神が化身して、肉体の形を以て表現される⁽²²⁾。

このように賀川豊彦は、パウロが神を言葉によって我々に明らかにしたと指摘した。人間パウロの果たした役割がわかる。賀川豊彦はパウロが述べた予定論、先在論、復活論について、無限の愛が有限の愛として実現される場面として次のように簡潔に説明している。すなわち予定論とは「無限の愛が有限に表現せられる場合にその傾向は一定である」ということ、先在論とは「実現せられし愛は先在する」ということ、復活論とは「その愛は再生せしむる愛である」ということである。今、我々は有限の世界において不可解なことであっても、やがては絶対・無限のうちに回答が発見されるという。

予定論については「カルヴァンのな予定論とは違って、愛が実践的に予定をするという意味がある⁽²³⁾」という指摘がある。これは次の聖句を根拠としている。「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なるもの、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままにお定めになったのです」(エフェソの信徒への手紙1章2-5節)。これは近代キリスト教神学に拘束されず、独自の立場を表す賀川神学第三の要点である。また賀川豊彦はヨハネによる罪と義と審判をパウロの場合と同様に解釈した。

その方が来れば、罪について、義について、また裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、また裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。(ヨハネによる福音書16章8-11節)

これを賀川豊彦は、「罪とは人々が人々を救おうとするイエスを信じないこと、義とはイエスが最高善である神に行くことのゆえに人々がイエスを見失うこと、裁きとはイエスの愛が届かず人々が断罪されることを意味する」というように理解した。いずれもイエスの愛が神と人々にどのように関係するかの問題である。彼はヨハネもパウロと同様に、イエスの愛を基準にしたと見做した。彼はこのような前提に基づいて三位一体の神については次のように解釈している。

神は超越的の愛であり、内在的の愛であり、また表現の愛である。この三つの位取りをとるが、しかしそれは一つの愛の三つの形相に過ぎない。パウロにおいてヨハネにおいても、無限の愛が無限の世界に表現すると考えた点においては一つである⁽²⁴⁾。

このように賀川豊彦はパウロの神学の中に、神の超越性、神の内在性、神の表現性を見出した。すなわち人は罪を悔改めるばかりではなく、神の愛を受け止め、それによって他者に仕えるということを確認していたといえるだろう。

3. 個人の救済と社会の改造

3.1. 社会改造の仕組み

バプテスマのヨハネはイエスを「神の子羊」と預言した⁽²⁵⁾。イエスはこれを自らの進むべき道として受けとめた。そして創造主なる神の前に人間社会のすべての問題を詫びるために十字架刑を選択した。自分は自分、社会は社会というのではない。イエスは究極の隣人愛を実現するために、社会の罪は自分の罪であるとして第三者の罪過をも連帯保証人として弁済した。全人類の全責任を引き受けたというのである⁽²⁶⁾。

賀川豊彦のこのようなイエス理解は後の神の国運動と協同組合運動に反映された。そこでは運動を個人の救済にとどめず、社会の改造を目的とした。個人の救済は他者の救済に連なる。救済された個人は自発的に他

者を救済して初めて真に救済されるのである。真に救済されたということはその人が神および救済した他者から喜ばれるときに確認できる。その連鎖が広がることは社会の改造を意味する。他者の救済が集合されるとき社会は根底から改造されるという仕組みである。個人の救済は社会の改造へつながるといふ考え方はイエスの活動を踏襲して体得された賀川豊彦の「実現神学」の核心である。これが賀川神学第四の要点である。

3.2. イエスの自覚

しかしながら今日、魂の救済は個人救済の問題として扱われ、社会改造は社会制度の問題として扱われるのが普通である。両者の間には有機的なつながりが見られない。ということは賀川豊彦の神学思想には問題があるのだろうか。それについてはさらに探求されなければならない。

キリストは人類の全局的愛に対し、人間の過去に対し、もう一度記憶するために、贖罪愛を現し、未来に対しては復活愛を示し、現在に対しては奇跡を現された。それは神の愛である。・・・現在の哀れむべき人を奇跡をもって癒し、死んだ人間には復活を与え、罪人には救いの道がある。すなわちキリスト教とはこういうキリストの愛による実現性の運動である。⁽²⁷⁾

神の愛は生活者の現実には投影される。それは空間軸を超えて機能する。ものごとの認識は外面の世界から内面の世界へ転換される。それはまた時間軸を超えて機能する。現在の哀れむべき人が癒されるのは奇跡の愛としてその人の問題が取り除かれることを意味する。十字架による価値の転換である。賀川豊彦によれば過去に失敗した人の罪過は贖罪愛によって救済される。また未来の死を恐れる者には復活愛が約束されるという。イエスが復活について問われたとき「我はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と応えたのはアブラハム、イサク、ヤコブが経験した神、すなわち常に生きて働いておられる神を意味するという。同様に百

匹の羊の中の失われた一匹を尋ねる譬え、父が放蕩息子を救おうとする譬え、あるいはぶどう園に遣わした息子の譬えとして人の子の死と回復が例示される⁽²⁸⁾。これは神が命懸けで人々を愛し失われた人を救済するというを示唆するイエスの喩えである。賀川豊彦はこの喩えに加えて、イエスは自ら神の意思を達成するために十字架の道を自覚されていたことを表すと指摘した。イエスご自身が贖罪愛を実践するという使命を強く自覚されていたということである。

イエスと人々との関係は賀川豊彦によってさらに次のように説明される。人間の細胞は分裂して器官が造られるように、神はイエスが実践した愛を人間の内面に形成される。聖霊の働きによってそのように霊的な特性が育まれるという。これはその人の外面に現れイエスのように神の愛を実現するのであるから、他者を救済しようとする働きを意味する。そして連鎖反応を起こしてついには社会改造に繋がることになるであろう。また彼は、イエスが早くから自分の死を自覚しながら公にしなかったのは人々の贖罪のために十字架に就いて死ぬその時に聖霊の働きによって一斉に理解されるだろうと考えていたからだという。

神の内容である愛を物質的な実証的なものに表現するには、十字架の外にできない。講壇の上から説く口だけの愛では駄目である。それが判らぬからキリストは十字架にかかって見せて示されたのである。あらゆる努力をして、物質の世界に、時間の上に、肉の世界に、罪の世界に、神の愛を翻訳したのである⁽²⁹⁾。

賀川豊彦によれば、イエスと人々の関係は十字架で示されたイエスの愛を介して形成されるというのである。

3.3. 十字架の選択

イエスは神学論を唱えた訳ではないから、ユスティノス等初期のキリスト教神学者はイエスの福音をギリシャ哲学の枠組みで考えるしかな

かった。一方賀川豊彦はどうしたのかといえ、三位一体、予定、復活等神学の諸問題はイエスの生活を踏襲することによって経験的に体得したといえるだろう。

彼(イエス)の思想そのもの、愛そのもの、愛の実現性そのものが彼の神学であった。彼は預言を信じた。彼は預言通りに自分の行動を選んで行った。そこにキリストの独断とも見える決定がある。彼はそれをしなければ神に済まないと思ひ、十字架に向かい自分の進路を選んだのである。一面から言えば独断的だけれど、他面からいえば、キリストは神に対して「赦してもらいたい、人類の罪咎に対しては誰かが犠牲にならなければならぬ、済まない」と言った彼の⁽³⁰⁾気持ちである。

これは賀川豊彦独自のイエス観を表す。イエスは旧約聖書に啓示された預言を神の意思として受け入れた。そしてそれを自発的に自分自身が行動する道として選択した。神の意思を自らの意思として同定したということである。このとき作用する内面的な力が贖罪愛の実践を意味する。イエスは外部からの力に支配されるのではない。これまで福音主義神学の解釈では、神は自己を超越した存在であって外面から働き掛けるのであるから、神にはただ従順でなければならなかった。しかし賀川豊彦はイエスが神の意思を認識した上で、自らの判断で十字架への道を選択されたという。イエスの単なる独断とは異なる、宗教的経験であるというのである。たしかに表層的にあるいは個人主義的に見るならば、このような行動はイエスの独断ということになるだろう。しかしイエスは旧約聖書から神の意図を斟酌し、全人類の墮落に対する連帯責任を認識して、自発的に十字架を担う道を選択したというのであれば、それは高度な宗教的経験を表すことになる。人間としてのイエスの宗教経験は荒野の誘惑、ゲッセマネの祈り、十字架上での叫びに記されているように⁽³¹⁾試練の後に獲得されたものであることがわかる。そのような自発的な宗教経験

は活動の動因となることを示唆する。賀川豊彦のいうイエスの宗教経験は「実現の神学」の核心に位置付けられるといわなければならない。賀川神学第五の要点である。

賀川豊彦は、人間イエスは旧約聖書を学び、背後を貫く神の意思を受けとめたという。そのように考えるならば、マタイによる福音書の冒頭にあるイエスの系図は人類に啓示された生きた神の意思の系図、アブラハム以来父から子へと継承されてきた神の意思の系図と見ることができる。彼らが神に願い、神に祈り、意思決定をしたことは確実に集積され継承されてきた。その結晶として旧約聖書がある。イエスはこの旧約聖書に示された神の意思を継承した。そして前述したように、バプテスマのヨハネの叫び「見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ」をきっかけに実行する道を選択した。イエスが自ら十字架刑を決断することによって、聖書の預言が実現されたということを表す。賀川豊彦はイエスのこの宗教経験を神学の中心に据えて「実現の神学」として提唱したのである。

4. 社会運動の根本哲学としての神の愛

4.1. 神学思想と科学哲学の結合

物質生活のうちへ神の愛を翻訳する時それは十字架の形を執る。これが我々の社会運動の根本哲学である。⁽³³⁾

賀川豊彦は社会運動の基本精神をこのように定義し、論証を展開した。それはパウロが下記のように宣教の基本精神を十字架に定めた方向性に重なる。十字架を論じる時パウロがユダヤ人とギリシャ人の違いを混同しないように配慮したことが前提になる。我々は十字架の意味を理解するにはユダヤ人型でもギリシャ人型でもなく、神の領域に立つように注意を喚起される。

ユダヤ人はしるしを求め、ギリシャ人は知恵を探しますが、わたし

私たちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシャ人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさ⁽³⁴⁾は人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

賀川豊彦はユダヤ人とギリシャ人の思考法の違いに着目した。ユダヤ人型の人々に対してはイエスが喩えを用いて悟らせようとした事例で説明したことは前述した。ギリシャ人型の人々に対する例として彼は近代のマルクス哲学を挙げた。それは肉体のみを見るから唯物的である。人間は物質であるから死物の集合体に過ぎないという。この見方はプラトンの時代から現代に至るまで、ギリシャ哲学の影響を受けた多くの人々には抵抗がないだろう。人々は人間の視点から神を見ようとすると、置かれた場面の違いによって神の様々な側面を見ることになる。そのように認識される神は変動する神となる。これは人間主導による神観である。その結果、ガリレオとローマ教皇の場合のように衝突することになるという。

そこで賀川豊彦は十字架が表す神について瞑想し、ヨハネの言葉によって例証した。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた⁽³⁵⁾」という聖句については、神の愛を根本として次のように解釈した。「(愛は)無限の愛が有限の世界に自らを表現し、肉体を通じて神が発言すること」である。肉体は単なる肉体ではなく無限の愛の表現として考えられる、その奥には愛が秘められ、生命が認められ、それが実現されるのだという。神の存在は人間の良心を探り、そこに映し出されるという認識である。ギリシャ人型の神観が人間主導であるのに対して、これは神主導である。前者が外部から人間に働きかけてくるのに対して、後者は内面において自覚的に神が認識される。個人の内面においてイエスの十字架愛が認識される時、自発的に応答して他者に反映されるようになることを意味する。賀川豊彦が唱える社会運動の基本精神はこれが出発点となる。

賀川神学第六の要点である。

人生観を基礎とする神学はおのずから愛の神学にならざるを得ない。良心によって純粹の愛を直感するところに宇宙意思が認識される。・・・我々の人生観は良心を基礎としその実践を重んじる。良心は一つの小宇宙である。宇宙全体のすべての法則はそのうちに働く。良心を見るならばそこに宇宙全体の総合がある。・・・愛を実行し苛烈なる良心生活をやっているならばその切尖に宇宙の力が感電してくる。⁽³⁶⁾

言い換えるならば、賀川豊彦は客観的に働きかけるギリシャ哲学と主観的に働きかける聖書神学が混同しないように切り分けた。そして人間主導の領域は退けた。彼のいう聖書神学とは「愛の歴史の上に神学を樹立しようとする試み」である。そこで愛の行動によって神の認識が可能になるのである。

私はこの頃の体験で、破戸漢や酔払いを改心させるには、人間の心では駄目だ、神の気持ちにならなければならないものではない、ということをはっきり知った。⁽³⁷⁾

これはイエスの示した神の愛の根本原理を信じる神学を表す。すなわち「実現の神学」の根本となる認識論であると結論付けられる。

4.2. 十字架愛の実践

ユダヤ人型の神学思想とギリシャ人型の科学哲学思想は直接結びつかない。これまでキリスト教神学はギリシャ哲学系統の場において演繹的な手法で結合しようとして度々混乱を招きあるいは衝突を引き起こした。賀川豊彦は終始一貫して、両者を結び付けるには神学が愛の歴史の上に立つべきことを訴えた。それによって問題に取り組む基本精神が明確に

なるという。彼はこれを「実現の神学」と唱えたのである。

この「実現の神学」の精神はどのように実現されるべきなのか。社会活動ではその基盤を形成する理論は教育、医療、組合、福祉、教会活動などの事業体の現場においてもギリシャ系科学哲学思想に基づく技術論が必要とされる。関係者はそのような環境で教育訓練を受けてきた。また現場で提起される問題に対処するためにはそうせざるを得ない。結果として各々の事業体の基本精神はなおざりにされる傾向がある。

それゆえ賀川豊彦の唱える「実現の神学」を改めて見直す必要がある。まず無限の神の概念は有限の世界の言葉に置き換えられる。そこで述べられる神概念、および神と人との関係は次のようになる。神概念とは父なる神は超越の神、イエス・キリストの神は表現の神、聖霊の神は内在の神を意味する。先に述べたように神と人との関係では、神の贖罪は人間の失敗の回復を意味する。神の奇跡、神の再生については次のようにいえるだろう。神の奇跡とは世の不条理から開放されることであり、神の再生とは人々の不安を解消することになる。これは時系列的には十字架は過去に起きたことを、復活は現在起きることを、再臨は将来起きるだろうことを示唆すると理解できる。

両者すなわち無限の領域の概念と有限の領域の精神を繋ぐ繋ぎ手は言葉で表わすならば神の愛である。この愛を実践することによってパウロの神学は賀川豊彦の神学に結びつけられる。イエスの父なる神の概念はパウロの言葉を通して、賀川がいうように我々の良心に反映される。我々はそれを他者に対して実践するときに無限の神を発見し得る。これが贖罪愛実践のメカニズムである。賀川神学はこのような関係を明らかにしたといえよう。賀川神学第七の要点である。

繰り返しになるが、賀川豊彦はユダヤ思想の世界とギリシャ哲学の世界を神の愛の働きによって結合しようと訴えてきた。彼はイエスの愛の啓示、パウロの言葉による証言を実践することによって結合しようとした。人間の良心の中に反映される神の愛を明確にすることを唱え、生活の場で実践した。このような賀川豊彦の「実現の神学」は社会活動の出

発点となる。彼にとって神学とはイエスの十字架愛の実践であった。『実現の神学』は次の祈りで締めくくられている。

父なる神。今日の時代は非常に険悪でありまして、そこには思想の混雑が至る所にあらわれております。しかし我々にはイエス・キリストの示した給うた愛の根本原理を信じることによって迷わざる神学を示してください。主キリストによってお願いいたします。アーメン。⁽³⁸⁾

おわりに

賀川豊彦の『実現の神学』を検証吟味する過程で七つの要点が焙り出された。それは以下のように要約される。

- 1) 賀川豊彦は、イエス・キリストの経験に学び、独自の神学に基づいて活動した。
- 2) 賀川豊彦は、イエス・キリストは宗教経験あるいは啓示を用いて、パウロは証言あるいは言葉を用いて人々に働きかけたことを明らかにした。
- 3) 「実現の神学」は、近現代の西欧概念型の神学には拘束されない。
- 4) 「実現の神学」は、個人の救済が社会の改造につながる仕組みを示唆した。
- 5) イエス・キリストは、旧約聖書の預言の意味を受け止め、それを実現することがご自身の使命であると自覚して、十字架刑を選択した、と理解できる。
- 6) 社会運動は、個人の内面に反映された神の愛を実践することを出発点とする。
- 7) 無限の領域と有限の領域は、神の愛によって結合される。

無限の領域と有限の領域の結合とは、具体的には価値の変換である。神学の世界からいわゆる実学の世界への変換である。賀川豊彦はその方向

性を『友愛の政治経済学』において提唱した。イエス・キリストと生活者の間に、主観的な価値運動と客観的な価値運動の間に往還路を設けよという。生命、労働、交換、成長、選択、法則、目的という7つの価値の通路である。そこでイエスの言葉が7種の協同組合に繋がれる。その全体が一つの共同体として、愛と平和の社会を形成するという仕組みである。⁽³⁹⁾社会運動の各事業体はこの通路を踏まえて「実現の神学」各論を構築することができる。賀川神学を神学することは、真の社会運動の第一歩を踏み出すということになるだろう。

注

- (1) 東京神学大学神学会編『キリスト教組織神学辞典』教文館、1992年、1頁。
- (2) 雨宮栄一「賀川の信仰思想への接近」、本所賀川記念館編『賀川豊彦研究』2号1983年、3頁。
- (3) 横山春一『賀川豊彦伝』警醒社、1959年、15-23頁。
- (4) B. バウン『純粹哲学の原理』を翻訳、後に『人格社会主義の本質』（1949年）を出版した。
- (5) 同書360-363頁。
- (6) 雨宮栄一、前掲論文5頁。
- (7) 同書6頁。
- (8) 雨宮栄一、同論文7頁。
- (9) 雨宮栄一、同論文25号1頁。
- (10) 賀川豊彦『実現の神学』小冊子、1929年、2頁。
- (11) 同書3頁。
- (12) 同書12頁。
- (13) 1929年7月26日から奈良県多武峯村で開催された第7回イエスの友の会で講演録による。
- (14) 『実現の神学』は雲柱社編『雲の柱』8巻9号・同8巻10号（1929年）に掲載された。小冊子は東京基督教青年会宗教部『キリスト教講座』第3期第6巻（1930年）抜き刷り、『現下諸問題の是非対抗熱弁集』雄弁

新年号第 22 巻 1 号付録（1931 年）として刊行された。

- (15) 黒田四郎『人間賀川豊彦』キリスト新聞社、1979 年、107 頁。
- (16) 武藤富男編『賀川豊彦全集』キリスト新聞社、1973 年、3 巻 491 頁。
- (17) 前掲書『実現の神学』5 頁。
- (18) 栗林輝夫「不況の中で賀川の神学を再読する」『季刊 at 15 号』太田出版、2009 年、61 頁。
- (19) 日本聖書協会編聖書新共同訳 1999 年刊、使徒言行録 26 章 12–20 節。
- (20) A. ハルナック（深井智朗訳）『キリスト教の本質』春秋社、2014 年。
- (21) 前掲書『実現の神学』16 頁。
- (22) 同書 17 頁。
- (23) 同書 16 頁。
- (24) 同書 17 頁。
- (25) 前掲書ヨハネによる福音書 1 章 29 節。
- (26) 前掲書『実現の神学』10 頁。
- (27) 前掲書『実現の神学』10 頁。
- (28) 前掲書ルカによる福音書 15 章 1–23 節、20 章 9–18 節。
- (29) 前掲書『実現の神学』11 頁。
- (30) 同書 9 頁。
- (31) 前掲書マタイによる福音書 4 章 1 節以下等。
- (32) 前掲書マタイによる福音書 1 章 1–17 節。
- (33) 前掲書『実現の神学』18 頁。
- (34) 前掲書コリント信徒への手紙第一 1 章 22–25 節。
- (35) 前掲書ヨハネによる福音書 1 章 14 節
- (36) 前掲書『実現の神学』19 頁。
- (37) 賀川豊彦「贖罪愛を基礎とする新道徳」、賀川豊彦編『雲の柱』17 巻 1 号、1939 年、4 頁。
- (38) 前掲書『実現の神学』20 頁。
- (39) 賀川豊彦（加山久夫訳）『友愛の政治経済学』コープ出版、2009 年、37–55 頁。

（立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学 おおの・たけし）